

三宅 秋のイベント 活性化への期待込めて

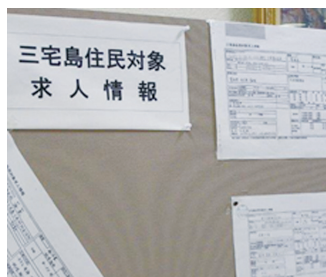


産業祭に出品した入選作物

三宅島では秋のイベントとして、恒例のエンデュロレースや島産業祭が実施される。最近、マスコミで取り上げられることが多くなった島の更なる活性化に繋がることを期待したい。

○11月10日(土)「三宅島エンデュロレース2018」が例年のように開催される。会場は7島展望台周辺でオートバイのレースが溶岩石地帯で過酷な競技。来島の選手と島民も競技に参加するが、プロの選手も日本では一番難しいレース

移住・定住の促進を 村が相談窓口を設置



島の求人情報

三宅村に移住・定住相談窓口を開設して人口増対策に本格的に取り組むを始めた。担当は三宅村

だとの感想をもらしている。それだけに賞金・商品もそれなりに揃いて、表彰式も行い交流を深めている。島民観覧には、バスなども用意している。(問い合わせ) 三宅島スポーツ振興会 TEL: 04994-815681

で開催される。島の野菜や食べ物販売「島市」も並行して行われる。品評会など島上げの盛会で人気イベントとなっている。また、当日に商工会青年部が「キミが社長だプロジェクト」と題して「会社設立と経営の疑似体験」をする。対象・小学校5年生

中学校3年生まで定員15名(グループでの申込可)、3つのグループに分かれて商品や飲食物の販売。事業計画、資金計画をたて開店して、終了後は決算と反省会を行うなど、有意義な企画も行われる。皆さんで応援して、卒業後は島で活躍してもらいたいとの期待をこめたい。

役場の企画財政課 企画情報係。(TEL: 04994-5-0984 FAX: 04994-5-0932 Mail: miyake03@vill.miyake.tokyo.jp) 受付は、祝日を除く月々金曜日 8時30分～17時15分まで。9月13日～19日に「第7回島暮らし体験事業」を実施した。東京、神奈川、広島などから20～40代の男女10人が参加して

好評だった。その他三宅島では島婚ツアー、農業体験などで移住をして実績を上げている。仕事の段取り、住宅修繕補助、きめ細かな相談役がなければ一時的となり成功、定着はしない。テレビなどで紹介のケースをみると、長期的投資で行政サービスの成果が試される。御蔵島の取り組みも参考となる。

三宅島新報

発行所：三宅島ふるさと再生ネットワーク
〒173-0005
東京都板橋区仲宿2-1
TEL 090-4922-0798
FAX 03-3964-4065
発行人：会長 佐藤就之

事務局便り

三宅島の今年の夏は、台風の影響で企画されたイベントや来島ツアーの企画も中止となるケースも多く影響が出た。また、連日の猛暑に見舞われた。

そのために畑もカラカラで野菜物も思わしくなかった。毎年の気象前線が三宅の上に居座るが今年は、雨もなかった。その代り全国各地で台風の被害で被災者が多数で復旧も遅れている。お見舞い申し上げます。

島の砂防堤66基施工・三宅支庁に感謝だが、まだ油断できない。なお、次号は1月1日に発行の予定です。

オーシャンファミリー 海洋体験センター 「海洋自然体験」参加者の声

「忘れられない」三宅島の夏

主催者 海野さんが取りまとめ

今夏、三宅島噴火後、第2の拠点となった神奈川県葉山町での活動に参加している方を対象に三宅島ファミリーキャンプを開催しました。日頃、島の魅力は伝えてきたつもりでしたが、実際に自分の目で見て、体験して、感じてもらえることが一番です。大久保浜にテントを張り、島の手や自然の濃さを満喫する3泊4日。参加された皆様の声が、島での体験の感動を伝えてくれます。(海野)

◎港区 30代主婦

今回の旅は、感動の連続、素晴らしい体験ができたことに感謝でいっぱいです。5歳の長男は、今朝、『僕も三宅島に住みたい!』と言い出しました。

◎葉山町 40代主婦

はじめての三宅島。海あそび、スノーケリングを満喫したのはもちろん、人間も含めた生き物のいのちの循環を肌で感じる事ができました。何もない溶岩原、そこに

◎葉山町 40代主婦

キャンプで一番良かったことは、子ども達が海のキレイさに感動して、たくさん魚が見られたことでした。子どもの思い切り自然

◎葉山町 40代男性会社員

日の出とともに鳴った大きな汽笛の音で目をさました私は、船のデッキに立ち、風を受けながら、だんだん近づいてくる三宅島をじっと見つめてい

ました。生まれて初めて見るその島は、中央に火山がそびえ、なだらかに続くす野は、青々とした照葉樹の森でおおわれていました。

長男が3歳のときに、NPO法人オーシャンファミリー海洋自然体験センターと出会い、入会の際に手にしたジャック・モイヤーさんの本で三宅島に魅了され、いつか子どもをキャンプに参加させてあげたいと思っていました。今回家族で参加できるキャンプ企画があると知り参加しました。

三宅島は火山によって自然が自然を創る島。噴火の自然災害にはとても

事務局にうれしい反響

「ぜひ島に行ってみたくなる」など

三宅島の自然や人々の暮らしと人情を「三宅島新報」は、寄稿などで紹介に努めている。特に、福島原発事故被災者で三宅島に移住している国分さんや三宅島支部長光安さんも協力している「海洋自然体験」ツアーで訪れる海野(ウンノ)さん、などの寄稿文は「新報」読者にも反響が良く、「ぜひ三宅島に行ってみたくなる」との声が、事務局にも寄せられています。今年の夏に体験したキャンプなどご家族の参加者の皆さんに感想をお願いした。素敵な三宅島の魅力を発信でき感謝しております。有難うございます。参加した神奈川県葉山町在住の男子小学生は、「たくさん、珍しい魚が観察できて楽しかった。また来たい」と興奮気味で話していたと伝えてくれました。(佐藤)

逆らえないものですが、人間や植物、生き物たちが、その自然との共存完成を創り直すことで、自然の恩恵を享受できる島だと知りました。その環境のなかで、子ども達と一緒に、海に森に溶け込んでゆくことを体験することができ、ファミリーキャンプに参加して本当によかったと思います。

ます。また、三宅島を熟知したオーシャンファミリーの経験と準備があったからこそ、安心して自然体験ができたのだと思います。子ども達の成長の糧となる時間、魅力あふれる貴重で充実した時間を家族で過ごすことができました。ありがとうございました。

夏の思い出 Photo Gallery

三宅島で行われたオーシャンファミリー海洋体験センター主催の「海洋自然体験」。8月、3回の予定が台風で1回中止に。しかし、参加者、特に子どもたちは、生き生きとした表情で、普段はすることができない島での様々な体験を満喫していた。



心配される次の噴火

島民の意見踏まえた対策を



三池地区は住宅撤去され跡地のみ 数軒再建した

2000年噴火から18年がたち、雄山の次の噴火が心配されている。2017年5月には、都と伊豆諸島の町村らが第1回伊豆諸島6火山防災協議会合同会議を実施した。そこでは山頂噴火の際の対応の軸は島外避難とされたが、前回の辛い経験に抵抗感が強い島民も多く、島民との意見を踏まえた対策の構築が切望される。

表面化しづらい不安

近ごろは、三宅村民によく質問されることがある。それは、次の噴火発生のこと。

今回の2000年噴火は、前回1983年(昭和58年)との期間は17年目で役場は、ぼつぼつ防

災訓練を準備しようとする矢先だった。その経験から当然の不安や備えの心構えを心の奥では気に留めているはずである。ところが村民の高齢化もあり、この心の奥の不安が表面化しづらくなっている様に推察される。防災訓練も実施された

が、どこまできめ細かく行われたかは気にかかるところだ。

「三宅村シルバー人材センター」は、会報「シルバーみやけ」で全戸配布されている「三宅村防災のしおり」必ず読むように啓蒙している。

想定は島外避難のみ

本題に入ろう。気象庁は、昨年3月24日に「三宅島の噴火警戒レベル判断基準とその解説」を発表(詳細はネット検索で)。また、昨年5月12日、都と伊豆諸島の町村らが第1回伊豆諸島6火山防災協議会合同会議を都庁

ご寄付者名

土岐富士子様 坂本健様
吉島輝雄様 佐藤宗ノ子様
吉野文雄様 光安千久子様
吉田信行様 (平成30年6月13日～9月30日)

【ご寄付受付先】

郵便振替口座 00120-3-545036
三宅島ふるさと再生ネットワーク

で開いた。先ず気象庁は、2016年5月に一時的に山頂から火山ガスが増え、山頂で割れ目噴火が多発した。そして、2006年前後から動きがあり「2016年頃からゆっくくりした伸びの傾向がみられ、マグマの蓄積が進行している」と指摘する。「想定する噴火場所、火山現象と影響範囲」①山頂カルデラ(山頂火口、あるいは雄山カルデラ内)②山腹(特に北東側と南西側)を上げている。山頂火口では、雨がたまりマグマが蓄積して水に触れると危険、火山性地震、微動の規模が増大している。また山腹とは割れ目噴火であるが今回の噴火でも海底で神津島・新島近海に移動、山頂に戻ったが今後も注意が必要としている。

第1回防災会議では、山頂噴火の場合には、島外避難のみを想定している(「都政新報」)

昨年5月16日号) 島民からは、あまりにも今回の島外避難の被害が甚大だったため、もう島外避難はごめんだとの声も強く聞かれる。全島避難指示、避難方法と期間、高濃度地区問題等が行政・専門家の判断と島民被災者との今回のように一方通行で乖離がおきない仕組みを考えたい。今からシンポジウムや対話集会等開き、忌憚なく話し合える場が設けられることを切望しておきたい。

編集後記

台風や地震といった災害が頻発する状況になっています。各地の被害状況をみると胸が痛くなります。

被害を減らすとともに被災された方々の心の痛みを少しでも軽くするために三宅の経験を語り継ぐことは重要だと考えます。私たちもできる限りのお手伝いを続けてまいります。

(DTPA一同)